

—あおぞら—

大気環境学会誌の存在意義の向上と活性化に向けて

大気環境学会誌編集委員長
国立環境研究所
茶谷 聡

1. はじめに

このたび、大気環境学会誌の編集委員長を務めることになりました。編集委員長はこれまで8年間の長きにわたり、速水洋先生(早稲田大学)が務めてこられました。これまでに培われてきたものを着実に引き継ぎつつ、今後も大気環境学会誌を発展させられるよう、精進していきたいと思っております。本稿では、最近の編集委員会の動きについて紹介した上で、大気環境学会誌の存在意義と活性化について、私なりの考えを述べさせていただきます。

2. 編集委員会の体制

編集委員会は、25名の編集委員で構成されています。このうちの10名は編集実務委員として、大気環境学会誌の企画や編集に関する業務を遂行しています。隔月で編集実務委員会を開催する都合上、以前の編集実務委員は関東近辺の編集委員に限られていましたが、コロナ禍においてオンラインでも編集実務委員会を問題なく開催できたこともあり、2022年9月からは関東以外の編集実務委員も加わりました。編集実務を強化するために2名増員し、あおぞら・研究室紹介、入門講座、J-STAGE・ダウンロード販売、AJAE目次、学会誌ホームページ、広報・各種たより、記録編纂の各業務に取り組んでいます。また、13名の編集委員が投稿論文の審査に携わっています。

3. 投稿論文の審査と学会誌への掲載

論文原稿が投稿されたら、委員長は担当編集委員を指名し、担当編集委員は査読委員を選定します。査読委員による審査結果から担当編集委員が判定案を作成し、委員長、副委員長を加えた合議を経て判定結果が決定されます。判定は「採用(無修正)」、「採用(要微修正)」、「採用(ただし条件付き)」、「不採用」の4種類としています。

速水前委員長によるあおぞら(速水, 2015)以降の大きな動きとして、大気環境学会誌の電子ジャーナル化が挙げられます。2019年5月に発行された第54巻の第3号から冊子体はなくなり、研究論文はそれ以前のものも含めてJ-STAGEで一般に公開されています。入門講座や一部の資料など、学会員限定の内容については、メーリングリストでお知らせしている購読者番号とパスワードを入力して閲覧することができます。これらの入門講座や資料は、ネットショップBASE

での販売も行っています。

また、2021年1月15日より、オンライン投稿・査読システムが導入されました。研究論文を投稿する際は、システム上で必要事項を記入し、関連ファイルをアップロードします。その後の担当編集委員の指名や査読委員の選定、審査結果の提出は全てシステム上で行われ、判定結果が著者に電子メールで送信されます。このシステムの導入により審査の手続きが効率化されるとともに、審査状況の把握も容易になりました。システム上のヘルプにはマニュアルなどが用意されていますので、投稿や査読の際には参考にして下さい。

4. 大気環境学会誌の存在意義

近年、研究実績を評価する上で、インパクトファクターなどの指標が重視されていることもあり、インパクトファクターもなく和文誌である大気環境学会誌への論文投稿が減少傾向にあることは否めません。しかしながら、大気環境学会誌なりの存在価値を学会員の皆様にも認識してもらい、研究論文を投稿してもらえるとありがたく思います。

日本国内の大気環境に関する貴重な研究成果を欧米誌に投稿しても、Local Issueとして却下されてしまうことがあります。大気環境学会誌としては、たとえ日本国内の大気環境に関するLocal Issueであっても、大いに歓迎します。その中には、日本国内の大気環境を理解する上での重要な知見がきっと含まれているはずで、大気環境学会誌は、日本国内の大気環境に関する研究成果を日本国内の研究者に広く知ってもらい、議論と研究を深める場として機能しうるものであると考えています。

また、和文ですので執筆の敷居が下がるのに加えて、読む側にとっても理解をより深めることができます。大気環境に関する研究成果は、今後の大気改善のための有効な対策を検討する上でも重要な知見を提供するものです。和文での研究論文は政策立案者の理解も得やすく、環境行政により大きく貢献しうるものであると言えます。

特に、前述の通り、大気環境学会誌に掲載された研究論文は、学会員に限らずJ-STAGE上で閲覧することができます。研究論文のオープンアクセス化は国際的にも進められていますが、高額な掲載料を請求されることが多くあります。大気環境学会誌は、比較的安価な掲載料で研究論文をオープンアクセスにできる貴重な媒体でもあります。

大気環境学会誌の存在意義はこれらに限りません。学会員

の皆様にもぜひ研究論文を大気環境学会誌に投稿し、掲載する意義を感じてもらえれば幸いです。

5. 大気環境学会誌の活性化に向けて

大気環境学会誌の活性化は歴代の編集委員長が取り組んできた課題であり、私が突然問題を解決できるような妙案を持ち合わせているわけではありません。編集委員、そして学会員の皆様と知恵を絞りながら、少しでも活性化につなげられればと考えています。

大気環境学会では、地方環境研究所の方々により活発な学会活動ができる方策が検討されています(伊豆田, 2022)。大気環境学会誌としても、活性化の一環として、地方環境研究所の方々により多くの研究論文を投稿してもらえるように、取り組んでいきたいと考えています。速水前委員長

から、各研究所の年報に掲載されている貴重なデータなどを技術調査報告として公表するよう勧められていますが(速水, 2015)、制度面や費用面で制約があるかもしれません(上野, 2021)。地方環境研究所からの投稿を促せるような仕組みも検討していきたいと思います。

大気環境学会の活性化に向けて、皆様のお知恵をお貸し頂きたいと思っております。何かご意見やご要望がありましたら、私までご連絡下さい。ご協力をよろしくお願い致します。

引用文献

- 速水洋: あおぞら, 大気環境学会誌, **50**(2), (2015).
伊豆田猛: あおぞら, 大気環境学会誌, **57**(6), (2022).
上野広行: あおぞら, 大気環境学会誌, **56**(2), (2021).